

1 校内研究の必要性 ー校内研究の意義ー

「何のために研究をするのか」を常に問い掛ける。

校内研究は、学校において、児童生徒の教育のために、教職員が共同で行う研究です。児童生徒の実態を正しく捉え、これをより望ましい方向に変えるにはどうすればよいか、研究の中心でなければなりません。そして、研究の成果は、児童生徒の変容の姿で立証されます。このように、校内研究は実践上の課題から出発し、実践によって実証され、研究の成果は日々の教育活動に生かされてこそ意味があるのです。すなわち、校内研究は、あくまで児童生徒を中心に据え、実践にしっかりと根を下ろした研究でなければなりません。（福岡県教育研究所連盟編『新訂校内研究のすすめ方』pp. 12-13）

もし、児童生徒の実態に教職員が問題意識をあまり感じていないような場合があるとすれば、自校の児童生徒の「よさ」と「問題」を明らかにし、整理するところから始める必要があります。そして、教職員が共有する学校課題に対し、PDCAサイクルによって学校改善を進めていくことで、学校としての教育活動のつながりやまとまりが生まれ、学校の組織的教育力が高まっていきます。このように、校内研究によって、個々の教職員の力量に頼る取組から、共有する課題の解決に向けて教職員が協働する取組へと移行させ、「学びの共同体」としての学校風土を築いていくことが求められています。

また、教職員が研究に努めなければならないことは、法律によって規定されています。

「教育基本法」（教員）第9条

法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。

「教育公務員特例法」（研修）第21条

教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない。

コラム

欧米の研究者によって取り組まれた研究に、「効果的な学校」の研究があります。社会的に不利な環境に置かれた児童生徒にとって、学校は大した効力を持ち得ないという見方に疑問をもって取り組まれた研究でした。不利な環境条件にあるにもかかわらず、児童生徒の学力水準が、中流階層の児童生徒と同程度の学力を保障できている学校に注意を向け、そのような学校を、「効果的な学校」と捉えて、なぜそう成り得ているか、を追求しました。「効果的な学校」には、ほぼ共通して次のような特徴が見いだされました。

- ① 児童生徒が学習に取り組みやすくするような学校の風土がある。
- ② 基礎的な技能をしっかり教えることを学校全体として重視している。
- ③ すべての児童生徒の学力達成に対して教職員集団が高い期待を抱いている。
- ④ 児童生徒の学力達成度の状況を把握・診断し、指導の目標を明確化している。
- ⑤ 強力で計画的なリーダーとして教授・学習活動に関与している校長の存在。

（浜田博文編集 『「学校の組織力向上」実践レポート』 pp. 16-17）

ここで明らかにされたことは、「学校内部の組織・経営的な要因によって、児童生徒の学習の質に大きな違いが生み出される」ということでした。

〔参考文献〕 福岡県教育研究所連盟編『新訂校内研究のすすめ方』 第一法規 1991

浜田博文編集 『「学校の組織力向上」実践レポート』 教育開発研究所 2009